

Title	源氏八景手鑑(彦根城博物館蔵)についての考察
Author(s)	古谷, 典子
Citation	デザイン理論. 48 P.78-P.79
Issue Date	2006-05-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52859
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

源氏八景手鑑（彦根城博物館蔵）についての考察

古谷典子／京都工芸繊維大学大学院博士課程前期

源氏八景手鑑（以下、彦根本）は一帖の画帖で、井伊家に伝来し、現在は彦根城博物館蔵である。紙本著色、各縦29.0×各横38.0cmの8つの場面で構成される。江戸時代の制作で、瀟湘八景や近江八景になぞらえ、『源氏物語』から8帖を選び、押絵とした画帖で、御簾・屏風・襖障子・手鑑・硯箱・杉戸・巻物・掛軸を貼り込み、それぞれを器物に見立てた絵画形態に画中画のように表現されている珍しい形式の作品である。

彦根本は未だ詳細な位置づけがされておらず、類似作品も非常に少ない。本発表では、作品概要を確認し、源氏絵としての特徴、他の源氏絵との比較を試みようとして、作品の制作年代の特定を試みた。

彦根本には6つの題箋が残されており、「帚木の夜雨」「須磨の秋月」「明石の晩鐘」「松風の帰帆」「玉鬘（手習）の晴嵐」「夕霧の夕照」がある。下絵は8場面残され、「行幸の暮雪」「玉鬘の晴嵐」が場面推定の過程で間違いが認められるため、場面推定を新たに試みた。

作品概要

- ① 屋台の中に描かれる。屏風の前の男性、消息を興味深げに見る男性、赤い衣装3人の冠直衣姿が御簾越しに見え、この場面は残された題箋から2帖「帚木」の「帚木の夜雨」といえる。
- ② 六曲屏風に描かれる。廊に立ち、海上の月を見つめる男性、その後ろに控える二人が描かれる。題箋から「須磨の秋月」であろう。

- ③ 障子の板部分に描かれる。吹抜屋台の室内に、外に視線を向ける男性がいる。迎えに来る明石入道の気配を感じた源氏が外を見やるところが絵画化される。13帖「明石」の場面であろう。
- ④ 画帖に描かれる。画中画に松と水景、吹抜屋台の中に明石入道と明石の君、母の尼君が描かれる。題箋との一致は、舟の帆が海原に描かれることから「松風の帰帆」であろう。
- ⑤ 硯箱の蓋に描かれる。雪ころがしをする3人の女童のみで、源氏と紫の上は描かれていないが20帖「朝顔」であろう。
- ⑥ 杉戸の木肌に絵が描かれる。草子に肘をかける源氏と女房の後姿が描かれる。題箋は残っていないが、下絵には「幻の帰雁」とある。41帖「幻」で紫の上の死後の源氏を絵画化したのであろう。
- ⑦ 巻物に描かれる。この場面は山中の邸に、尼姿の女性の衣服の一部のみが描かれている。山中であること、尼姿の女性から53帖の「手習」の場面であろう。残された題箋には「玉鬘の晴嵐」とあるが、モチーフが「手習」に近いことから「手習晴嵐」とする。
- ⑧ 掛軸に絵が描かれている。秋の夕日に扇をかざす人物と鹿の顔の一部が見られる。これは39帖「夕霧」を絵画化したものであろう。

器物に描かれる源氏絵

源氏絵は、やまと絵の題材として、時代を超えて愛好され、様々な分野に入り込み、屏

風や調度、装束、工芸品に描かれた。現存作例から器物に描かれた源氏絵がみられるようになるのは、室町時代以降である。17世紀の大名道具の調度品などには、王朝文化に関わるものも多く見られ、王朝文化への大名の憧れがうかがえる。

参考作品との比較

○「源氏物語細工貼交屏風」（個人蔵）は、彦根本と同じ図様の押絵が貼り付けられた、一紙各縦14.0×横64.0cmの二曲一隻の屏風で、画風、個々の仕立てが彦根本に非常に似ている。

○パークコレクションの「源氏物語八景」（以下、パーク本）八景形式の現存作品の中で最も古いとされ、左兵衛督基董（1669～1734）の手による33×768cmの巻物で、絹本着色の作品だ。「帚木夜雨」「松風帰帆」「夕霧夕照」「玉鬢晴嵐」「明石晚鐘」「乙女初雁」「朝顔暮雪」「須磨秋月」が描かれているとされ、彦根本とは、異なる帖で表現されている場面もある。パーク本の画面は、源氏か夕霧が画面右におり、背景で場面を区別させる手法をとっている。

これらの八景は、瀟湘八景と対応しているとされ、そこから着想を受け、連想される『源氏物語』の場面を描いたとされる。パーク本は、全体的に人物の表情や動きが固く、定型化した伝統的な土佐派の源氏絵とは大きく異なる。

○「源氏物語絵巻 湖水五十四帖」一卷 石山寺蔵 紙本着色 35.2×987.2cm 江戸時代中期（以下、石山本）

各場面が扇面、団扇、掛軸、書物、鼓、屏風などの様々な器物に描かれ、源氏絵としては珍しい形式である。18世紀前半の作品とされる。

彦根本の位置づけ

江戸時代初期、大名家でも和歌は様々な場所であられ、和歌や王朝物語への関心が高められ、教養としての文学が必要とされた。それは絵画、大名道具などに王朝文化に関わるものも多く見られ、和歌を盛り込んだ装飾や和歌にまつわる銘を持つものがあるほどである。よって彦根本は、17世紀の大名と宮廷文化との関連の流れを汲む作品ではないだろうか。画風や画面の大きさは17世紀後半の源氏絵の要素を持つ。

18世紀の源氏絵制作では、伝統的なものと石山本のように珍しい形式のものが描かれるようになる。

19世紀にも王朝文化への関心が高まり、源氏絵は制作されたが、おおらかな画風へと変化し、彦根本ほど細密な絵は描かれることはない。19世紀は伝統的な源氏絵も存在したが、屏風などの大画面の作例が大半である。

こうしたことから、彦根本は17世紀の王朝文化への憧憬から19世紀の王朝復古の動きの流れの中で制作された作品といえるだろう。

彦根本はパーク本に影響を受け、器物に描かれた源氏絵の流れや、パーク本や石山本のような作品の影響を受けたとし、比較すると、彦根本は18世紀前半の作品であると言えるだろう。

江戸時代、源氏絵の展開は器物や八景など様々な要素と絡み合うことで多様な展開を見せている。彦根本は伝統的な土佐派の源氏絵の様式を見せながら、器物に描くという江戸時代の源氏絵享受の多様さの一側面を示している。